「みどりおばさん、ちゃいろおばさん、むらさきおばさん」

むかしむかし、ある小さな町に、小さな通りがありました。
その通りには小さなきいろい家があり、
その家には3人のおばさんがすんでいました。

Elsa Beskow

夢見る力が育つとき

～エルサ・ベスコフの世界～

スウェーデンの子どもたちが幼少期に、親や保育士、先生などから繰り返し繰り返し読んでもらう絵本。それがこの「3人のおばさんシリーズ」です。比較的多い文章量であるにも拘わらず、子どもたちが夢中になって聞き入るストーリーの面白さ、挿絵の美しさは、ベスコフの真骨頂と言えるでしょう。

正直であること、優しくあること、勇敢であること、賢くあること…多くの教訓を含んだ物語には、エレン・ケイ[※1]らの影響を受けて、急進的な考えを持っていながらも、子どもたちにはしっかりとした指導としつけや戒めが必要と考えていたベスコフの、教育への姿勢と道徳観が垣間見られます。

いつも緑の服を着て、庭仕事を趣味とする「みどりおばさん」、茶色い服でお菓子を焼いている「ちゃいろおばさん」、紫色の服の、刺繍が得意な「むらさきおばさん」。向かいの家には、青い服を着た「あおおじさん」が住んでいます。ある日愛犬のプリックがいなくなり、おばさんたちはそれぞれに探しに出かけます。そして、孤児のペッテルとロッタと出会い…興奮と安堵に満ちた物語と、やさしい色合いの挿絵と影絵が、このシリーズの特徴です。

それぞれに得意分野を持ち、自立している3人の未婚の姉妹と、養子となる2人の子ども、向かいに住む男性…慣習にとらわれない家族構成は、母親とおば、おじと一緒に暮らしたベスコフ自身の幼年時代の経験がベースになっています。

「3人のおばさんシリーズ」は、1918年に出版されたこの作品を第一作目として、全部で5冊描かれました。どの作品も、男女同権が叫ばれていた当時のスウェーデンの時流を感じさせるだけでなく、背筋を伸ばし、未来を見つめていたベスコフの、美しい力強さを私たちに伝えてくれます。

※文献　エルサ・ベスコフ作・絵　菱木晃子訳「みどりおばさん、ちゃいろおばさん、むらさきおばさん」（福音館書店刊）

※1　スウェーデンの女性思想家。日本の大正デモクラシーにも多大な影響を与えた。著書に「児童の世紀」（冨山房百科文庫）がある。

監修：齋藤惇夫

作家・児童文学者。福音館書店の専務取締役（編集責任者）として子どもの本の編集に携わり、2000年に退社、創作活動に専念。著書に『グリックの冒険』（岩波書店・日本児童文学者協会新人賞受賞）、『冒険者たち』（岩波書店・国際アンデルセン賞優良作品賞受賞）、『ガンバとカワウソの冒険』（岩波書店・野間児童文芸賞、国際アンデルセン賞優良作品賞受賞）、『哲夫の春休み』（岩波書店）などがある。

エルサ・ベスコフ

1874年ストックホルム生まれ。小学校の絵画教師を務めた後、絵本や児童書の挿絵を描く。1952年、子どもの本に対するスウェーデンの最高賞、ニルス・ホルゲション賞を受賞。1958年には彼女の業績を讃え、スウェーデン図書館協会にてエルサ・ベスコフ賞が創立された。

PRESENT

今回ご紹介したベスコフの絵本を3名様にプレゼントいたします。ご希望の方は、同封のコミュニケーションカードまたは郵便はがきに、賞品名・住所・氏名・年齢・電話番号・メールアドレスを明記の上、ご応募ください（11月15日消印有効）。郵便はがきでご応募の場合は P.26の「お便り募集」の宛先までお願いいたします。なお、当選者の発表は賞品の発送をもってかえさせていただきます。